

吾は久遠の佛子なり

北 島 江 楓

燦たる星華の莊嚴を望みては宇宙の如何に宏大無邊なるかに驚き、江河の流れ洋々として晝夜を止めざるを視ては、吾等が住める此の天地には何物か偉大なる靈力を以て造化の技巧を弄ぶにはあらざるなきかを疑ひ、更に靜夜獨り机に寄りて沈思冥目して乾坤の大法を思索するは、此の天地を創造し、此の六合を支配するものは御も何物なるか、人は何處より生じ來りて何處に死し行くものなりや。人は何等の目的と希望とを以て此の人界の憂悲苦惱多き所に一日も長く一瞬時も人よりは長生せんとはする。明日をも知らぬかげろうの命を此の渺たる蒼海の天地に寄せて、名譽だの、地位だの、富だの、と騒ぎ廻るものありや。又命終の後も吾等が靈魂は不滅かりや、或は命終と共に靈は滅するものありや。思へば此の天地は不可思議にして、此の人生は不可解あるには非ずや。

不可思議ある天地と不可解ある人生とに就て、多くの哲學者は此が解決を求めんものと、幾多の研鑽考究と幾多の星霜を費すと雖も、未だ是に完全なる解決を與ふる能はず、然り、有限的人智を以て此の無限的悠久なる天地間の森羅萬象を悉知せんと欲するも亦至難の業からずや。

噫吾等が煩悶懊惱は、あざなふ繩のそれにも似て、日夜不斷に此れが爲に惱され、遂に『懷疑』てふ語辭の裡に所有不可解なる天地の現象をば埋没しざらんとす。斯る『懷疑』の念は則ち宗教的意識發動の最初にして、人は本然の性として必然に此の『懷疑』の永解を求め、畏怖を脱離して悅樂の妙境に到達せんとして、茲に絶對無限の權威ある何物か此の宇宙に存在して天地を支配し、萬物を料理するものあるを認むるに至れり。

見よ、天變地妖多き土地の人民は、雷鳴、電火、地災を畏懼して『雷神』『地神』を拵へて是れを崇拜し、洪水氾濫の多き地に於ては『水神』を祭り以て其が氾濫の無之を祈念し、或は『火の神』を拜

し、或は日月星辰を神化して此れを崇むる等、其他凡百の不可思議あるものには悉く神格を與へて以て其が恐怖に對する慰安の靈藥を造れり。斯くの如くして原始時代より宗教は進歩發展し來り、漸次に此の劣等なる宗教的意識は、世運の進歩に隨伴して開發改善せられて、稍々完全なる域に達し、萬邦の民が幽闇の巷に迷ひ、世をあげて錯亂に錯亂を極めたりし一九〇〇餘年の往昔、曙光將に浮びなんととして、夜氣森嚴たるベツレヘムの村に、紫の星を戴きて降誕したるナザレのイエスは、天地人類其他一切萬物を創造し、之を支配するものは唯一の神として、吾等が信仰の善力に因りて神の在せる『天の樂園』に到りて救はるゝことを得ると説き、其他ユダヤ教、イスラム教等續起して人心に慰安を與へたり。然れども神と吾等凡夫とは絶對に異りて、宇宙の外に別に天國あるものありて神の存在するを説き、神と人類とに大懸隔をなして、神と人との間には常に大江河の流るゝあり。故に吾等と神との間には何等の交渉關係も

無く、天國と娑婆とは上下處を異にし、吾等が天國々々と憧憬して欣求すると雖も、望むで到る可からざる空業徒勞にはあらざるなき歟。

人類齊しく生、老病、死、に惱殺せられ、世は暗愁の雲に閉されて、皆大なる慰安の光明を冀望しつゝ、ありし時、印度迦毘羅城中に忽如として白毫相の靈光を放ちつゝ、佛陀は降誕したまひて『三界は皆是れ吾が有かり、其中の衆生は悉く吾が子あり。我れも亦これ世の父諸の苦患を救ふものなり』との鳳詔を垂れ給へり。此の久遠の本佛々陀の金口は、弱き力なき人類に授くる最大の光明にてありき。

聖者茶毘一片の煙りとなりて三千年、世は大なるタイムの彫刻を受けて次第に文運の發達をなしぬ。此の間幾百年の邦家忽として起り忽として滅し、世界文明の精華を聚めたる古ローマの榮華も、ギリシヤ、サラセンの殷富も過去一炊の夢とかりて、空しく文明を研究するの資料とされるのみ。あゝされど吾等は佛陀三千年の往昔、鹿苑祈轉法

輪の旦より、拔提河の上り雙林最後の夕に至るまで、前後五十年間の轉法輪⁹殊に醍醐上味の法華經八ヶ年の説法に依りて吾等は眞によみがへりたるなり。

陰風暗愴怒濤逆卷く蒼々たる荒海の眞唯中に、海圖、掉は失はれ、羅針盤は其の用をなさずして航路にさ迷ひ、何處に到る業もなき急難の時、海上遙かに燈臺上に微かに輝ける一導の光明を認め、漸く其の航路をたどり復活の思ひを寄せしが如く、吾等は聖經法華の偉力によりて『懷疑』の念も氷解するに至りぬ。我等が憧憬措く能はざる天國も、寂光土も眼前に展開せらるゝに至れり。

苦惱に痛み煩悶にせめられて、波浪打寄する岸頭に生ふる『いつまで草』の如く、自らは常住不易千古變らざるものと思へども、一波一浪に其の草の定めなきが如き人生も、或は天地を支配するものは何物なるかとの疑惑も共に、赫々たる朝陽に草露の消ゆるが如く、『懷疑』てふ語辭も遂に法華經の光明に照されて其の瘡影をも止めざるに至れ

り。聖經法華に顯說せられたる事の一念三千の妙觀に因る時は、華嚴の瀧壺に金綱を設置し、淺間阿蘇等噴火口に鐵蓋を設くるの要あかる可し。

吾等が不可思議なる天地よ。不可解なる人生よ。苦痛多き一生よ。と厭世悲觀せし此の山林河海の緩く激しく、高く低く、繞れる天地こそ、不枯の妙華常に開き、不涸の流れ永へに盡くることなき常寂光の園にてはありしなり。

上野の高臺に登りて、人馬絡驛たる市街を瞻て某博士は『分子蠢動せり』と叫べりと。哲學者たる冷かなる眼には、我等の流汗して活動せる状態は一分子が蠢動せる如く映せしならむも、此の蠢動せる我等こそは、久遠本佛の永世の愛子にして常△に△我△等△が△渴△仰△隨△喜△の△涙△に△堪△へ△ざる△佛△陀△は△『△我△も△亦△爲△れ△世△の△父△』△宣△告△し△給△へ△る△慈△父△な△り△こ△は△、

漂浪多年、幾多の辛酸を嘗め、冥より冥に入らむとする窮子の、富める長者が我が父なりと傾知せし喜悅にも尙勝れる歡喜なり。生老病死哀別離苦等の憂愁多き人界も、天變地妖間斷なき天地も

『我此土安穩天人常住滿』の妙土妙境なり。我等は此の妙國土に久遠本佛なる世父の寵兒として生れたり。嗟幸中の幸、喜中の喜と言はざる可からず。『妙とは蘇生の義也』との空前絶後の聖祖の大鐵案は、我等が胸中迷雲を拂除して天の朗月を望むの喜悅を與へ給へり。(終)

偶 感

珂 月 生

弘安四年に大元蒙古國より我國に襲來するに及んで、宇津宮彌三郎貞綱、豫ねて宗祖が時の將軍惟康親王の懇請に依て與へられたと云ふ八大龍王日月両面の旗曼羅を陣頭に翻し、筑紫の地に至れば旗面所圖の神威に依り、忽に大風起て遂に蒙古の大軍を海中に敗没せしめたと云ふ(刪二四四メ己下)今就之一言旗面感應に關する愚見を、史實及信仰的の二方面より述べて見たいと思ふ。

偕宗祖御一代如來所遣行如來事の法華弘通は、

末法化境の通規に従ひ、通じて、折伏逆化であつた事は誰しも異論の無い事であると思ふ。然るに折伏を分て教行二門とし、時に隨て弘經の轍を異にする事がある。即ち(遺十四、五〇メ縮九四八)云此四菩薩現_二折伏_一時成_二賢王_一誠責愚王_一行_二攝受_一時成_二聖僧_一弘_二持正法_一云々。と云ふが如き其である。宗祖が四ヶ格言を絶叫して、凡夫の迷情を打破し、忍難不自惜身命の弘通は、此れ教門に約するのであつて、本化折伏中の攝受即ち聖僧の格を以てせられたのである。然るに滿天下惡鬼入其身遂に惑ひて捨邪歸正する事が出来なかつた。其處で本化地涌の菩薩が惟ふに、寧ろ國土に驗を起して之れを曉覺せんにはど。即ち數々天變地天自界反逆の難等を以てしたけれども、依然驚覺の色が見えなかつた。地涌の大地遂に憤て、隣國の王身に入り國土の謗法を誠責した。即ち蒙古の大王賢王と顯れて、愚王を誠責したのであつて、此れは行門に約する本化折伏中の折伏、正に刀杖を執持して謗法の輩を曉駭せしめたのである。之れを思ふて見